



日常にある小さな幸せ

つから数年前。

ある新聞のコラムに次の記事が載っていました。

パラリンピックで、男子400m、800m（車いす）で金メダルを手にした伊藤智也選手の言葉です。

今までの人生で五番目にうれしい。

表彰式でメダルを首にかけ、心から嬉しそうにそう語ったといえます。

パラリンピックとは、障がい者のオリンピック。

世界一を決める大会です。

日本代表として各国の代表選手と競い勝利するまでに、どれだけの努力と苦労があったかわかりません。

そうして、ついにつかんだ金メダル。

「人生で一番うれしい」と言っても、何らおかしくはない場面です。

しかし、伊藤選手は「五番目に嬉しい」と語りました。

なぜか。

文の続きに答えが書かれていました。

今までの人生で五番目にうれしい。

子どもが四人いるので・・・。

その子たちが生まれた時はもっとうれしかった。

わずか数行の文章ですが、深く心に伝わってくるものがあります。

それほど大きな喜びを、今すぐ見つけることは難しいかもしれません。

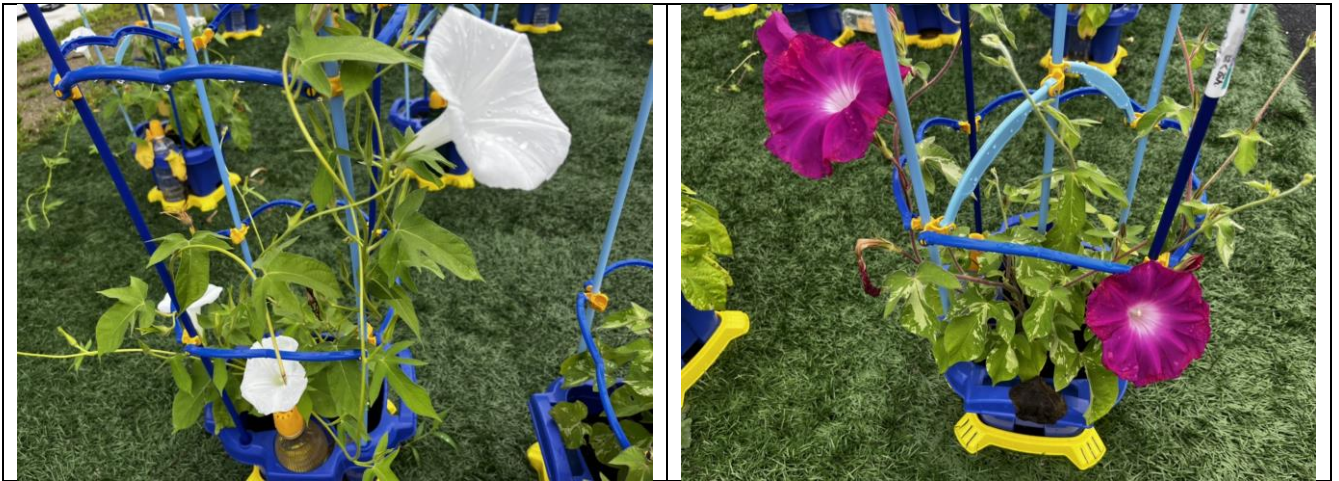
けれども、ささやかな喜びならたくさんあります。

毎日の学校生活の中にも、もちろんあります。

今朝。

1組の丹羽先生からこんなお話を教えてもらいました。

「白じゃなくて赤の花も咲いていましたよ。」



少しずつ咲き始めていた朝顔の花ですが、どういうわけか「白」の花ばかりが咲いていて、色付きの花が中々咲きませんでした。

というより、私は長年朝顔の花を育てている1年生を見守ってきましたが、「白」の朝顔を見たのは初めてです。(どうも、アントシアニンの形成過程の異変によって生じる珍しい現象の様です。)

白が咲き乱れている様子もそれはそれで神秘的で美しかったのですが、今朝ついにその中に色付きの朝顔が咲いたのです。

子どもたちも、

「先生ー！〇〇くんのところに赤い朝顔が咲いてたよ！！」

と伝えに来てくれました。

弾けんばかりの笑顔が、瞬く間に教室中に広がっていきます。

お花が咲いて、それを喜び合える人がいて、みんなが笑顔になって。

本当にささやかだけれど、なんて素敵なことなんだろうと思います。

思い起こせば、私が教師になりたての頃、ものすごい衝撃を覚えた出来事がありました。

その時担任していたのは2年生。

学級園に、ミニトマトの種を植えてからしばらくたってからのことでした。

「先生——！先生——！！芽が出た——！！」

目を見開きながら、大喜びで私の所に教えに来てくれたのでした。

当時、大学を卒業したばかりの私は、この時にハンマーで頭を叩かれたような大きな衝撃を受けました。

発芽の瞬間に全身全霊で喜んでいる子どもたちの「心」に驚いたのです。私も、かつてはそのように発芽の瞬間を喜んだ時期があったのでしょうか。しかし、22歳になった私は既に「土に種を植えた後に発芽する」ことをどこか当たり前のように感じてしまっていました。

小さな緑の芽吹きに、心の底から驚き、喜び、笑顔になれる感性をいつしか失ってしまっていたのです。

その小さいけれども確かな事実、愕然とした記憶があります。

「たのしみは 朝起きいでて 昨日まで 無かりし花の 咲ける見る時」

これは、江戸末期の短歌集『独楽吟』（どくらくぎん）の一節です。

作者を、橘曙覧（たちばなのあけみ）といいます。

橘曙覧は、日常の些細な出来事の中に喜びを見出し、いずれも「たのしみは」で始まる五十二の歌を書きました。

十数年前、ある式典で米大統領がこの歌集を取り上げ、日本人の心の豊かさを称賛したことが話題となりました。

日々の些細なことに喜びを見出す日本人の心根を絶賛したのです。

ありふれた日常に尊さを想う感性は、何気なく過ぎていく時間に輝きを与えてくれることでしょう。

そして、子どもたちはそうした美しい感性に卓越したものをもっています。

ですから、学校でそうした場面に遭遇した時は、自分の鈍くなっている感性に良い意味での刺激を貰えることがよくあります。

つい昨日の出来事です。

前髪が目にかかっている子がいたので、「今度切ってもらおうといいよ」と声をかけたことがありました。

時間がある時は図解して教えたりもするんですが、人間のあらゆる器官の中で最初に衰えていくのが「目」だと言われています。

その目に髪がかかっているとどうなるか。

眼の専門家が書いた記事から抜粋します。

目の疲れ

前髪が長くなることで一番問題なのは、目の筋肉が疲れてしまうこと。目の前に前髪があると人は無意識でそこにピントを合わせてしまいます。スマホを近くで見ているのと同じで近距離でものを見続けてしまうと筋肉が疲れ

てしまい、ピントが合わせにくくなり視力の低下に繋がる場合があります。

眼球を傷つける

前髪が長すぎると眼球に触れて傷つけてしまうことがあります。

傷ついたところから細菌が目に入ってしまう、目に異変が起こる可能性もあります。

目は多少の傷がついても、それを治すことが出来るので問題ないかもしれませんが、

常時目を傷つけているのはいいことではありません。

保健体育の時間ではここまで詳しく説明することもしばしばです。

先の子にも、「目を守るために」ということを付け加えて「今度切ってもらおうといいよ」と伝えた所でした。

すると、今朝。

その子は、前髪をすっきりとさせ、晴れやかな表情で登校してきたのです。

私は、その前髪をみて驚きました。

まず、ひと声かけたただけなのに、その子がそれをちゃんと覚えていてお家の人に伝えたこと。

これは当たり前前で、実はとても難しいことです。

そして、第二の衝撃は、たった一日で前髪がすっきりしてきたことでした。

今度の連休もあるので、どこか時間のある時に切ってもらおうといいよというニュアンスで伝えたのですが、まさかの早業でした。

もちろん、次のことを尋ねました。

「誰に切ってもらったの？」

と。その子は、

「お母さんだよ。」

と嬉しそうに教えてくれました。

その答えを聞いてまたまた驚きました。

とっても上手にカットされていたからです。驚きながら、

「お母さんすごいね～、こんな風にいつも切ってくれるの？」

と聞くと、

「えっとね、昨日YouTubeを見てそれから切ってくれたんだよ。」

と教えてくれました。

私はここまでを聞いてさらに驚きました。

そして、そのシーンを思い浮かべました。たったひと声かけられた言葉を忘れずに持ち帰り、お母さんがその言葉を聞いて YouTube を見て切り方

を学び、そして巧みにカットを施してくれた様子を、です。

一連の言葉を聞いて、全てをほめたたえました。

よく忘れなかったね、お母さんすごいね、前髪がとってもすっきりしたね…。

その子は、とても嬉しそうにお母さんの話を続けてくれました。

「お母さんね、手がとっても器用なんだよ。だからね…」

こんな風にやり取りできることも、とてもしあわせなことなんだろうなあということを感じた本日の朝でした。



ちなみに、先の橘曙覧の歌には、次の作品も存在します。

「たのしみは 妻子（めこ）むつまじく うちつどひ
頭（かしら）ならべて 物をくふ時」

仲睦まじく食卓を囲めることがどれほど幸せなことなのかを、改めて感じさせてくれる一篇です。

話すこと、学ぶこと、食べること、笑うこと、驚くこと…。

日常の中にある小さな幸せを見つけられる感性を大切に、日々を過ごしていきたいと思います。（渡辺道治） [1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](#)